

羽曳が丘 憲法九条の会 二ユース

第15号
2012年4月 発行
連絡先 林 正敏
Tel 956-0596
URL <http://habikigaoka>

第9回つどい 福島第1原発事故から 自主避難してきた話

5月13日(日)

● PM2時~4時
● モモプラザ



2011年3月16日撮影
左から4号機、3号機、2号機、1号機 (Wikipediaより)

東日本を襲った大震災と福島第1原発事故が起きて1年以上がたちます。それでも復興はなかなか進んでいません。そのなかでも最も深刻なのは原発事故です。福島県九条の会は「日本国憲法9条が依拠する「平和的生存権」II「恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利」ととらえ、原発事故はこの人権を侵害しているとして立ち上がっておられます。今回、福島から京都に自主避難されてきている方のお話を聞くとつどいを開きます。

三日目、初めて原発事故を知った

私は昨年の四月に、福島県福島市から大阪に、そして五月に京都へ、母子二人で自主的に避難してきました。我が家が住んでいた福島県福島市は、福島第一原子力発電所から60km離れたところにあるため、国が定めた避難地域に入っていません。しかし、事故から一年が経った今でも、放射線管理区域となる毎時0.6マイクロシーベルトを超える空間線量があり、なか

毎日娘は腹痛、私は下痢、もしや...

しかし、枝野大臣は「ただちに健康に影響はない」といい、長崎大学から派遣された放射能の権威は年間一〇〇ミリシーベルトまでは問題はないということ、多くの人は不安を払拭したものでした。そんな中私は、食料、水、燃料を確保するため自転車に乗り、街中を

には毎時10マイクロシーベルトを超える非常に高いホットスポットが存在するところの危険を感じ、自主的に避難をする人と、避難したくてもできない、また、危険とは思わず留まる人とは分かれてしまいました。二〇一一年三月十一日、未曾有の大地震が起こり、まもなく原発が爆発しました。しかし、我が家があった地域は、電気、ガス、水道のライフラインすべてが断たれ、原発の爆発という情報をすぐに得ることができませんでした。三日目によりやく電気が通り、テレビが見られるようになったとき、はじめて原発事故を知りました。福島市は大丈夫なのか？このままここにいていいものなのか？国から避難指示はあるのか？毎日毎日がとても不安でした。

もうこれ以上放射能汚染地域を広げないで

放射能値は、毎時23・88マイクロシーベルトと表示されました。その数値は安全なのか、危険なのか。私は情報を求め、寝る間を惜しみ、ネットにかじりつきました。そしてたどり着いたのが「放射能値にすぎない」という京都大学原子炉研究所の小出先生のコメントでした。やはりここにはいけない。私は避難を決心しました。そしてチェルノブイリのレ

ポートを受け、避難するのであれば原発から三〇〇km以上離れた土地と決めました。しかし、当時は道路が寸断され、交通機関はストップ。逃げる足さえないませんでした。そうしてやっとの思いで避難した京都が今、放射性物質が懸念される震災瓦礫を受け入れようとしています。その瓦礫を京都で焼却することになれば、安全な京都までもが放射能汚染されてしまいます。

私たちは福島でたっぷりと外部被爆させられました。もうこれ以上被爆したくないと、はるばる京都まで避難してきたのに、その京都や近隣までもが汚染されてしまったら、私たちはいつまでたいていすれればいいのでしょうか？震災瓦礫を受けられることにより、私たちのように被曝したものは更なる命の危険に脅かされるばかりか、被曝していない京都や近隣の人々までもが被曝の危険にさらされるのです。政府は「絆」キャンペーンを打ち出し、震災瓦礫を受け入れることこそが被災地を救い、復興を助けることであると、全国キャンペーンをうち出しています。ですが、私はそうは思いません。復興を助けるのであれば、被災地で瓦礫処理施

設を建設し、雇用を確保することのほうが早くはありませんか？それよりも、被曝の恐怖に怯え、命を脅かされている福島の人々の避難を受け入れること、そのことの方がずっと大きな支援だと思いませんか？いまだに、福島に残る子どもたちはたくさんいます。放射線管理区域以上の空間線量が存在する中を、通学し、運動し、放射能汚染された食品を食べさせられて暮らしています。チェルノブイリ原発事故のレポートから、被曝してしまった子どもたちでも、安全な場所に短期間でも避難して安全な空気を吸い、安全な食糧を食べれば、深刻な病気が免れていることが分かっています。

戦争を知らない世代の人たちへ 空襲を受けたときに体験したこと

だから私は戦争には絶対反対です！

いきなりの空襲 降ってくる焼夷弾 あたり一面焼野原

昭和20年6月29日未明、激しい砲撃の音で目が醒めた。「空襲だ」という父の声で、裏庭に掘った防空壕に家族4人飛び込んだ。その頃、やっと空襲警報が鳴り始めた。それから約1時間、何度か焼夷弾が降り注ぎ、私の家にも2発落ちたが父と二人で消し止めた。高台に広がった二百戸ほどの住宅で焼け残ったのは私の家のある一角のみであった。近くに住む父の友人は屋根を破って落ちてきた焼夷弾で大火傷を負い数日後死亡した。

その日の朝7時、まだくすぶる焼跡を通って海軍工廠へ出勤した。当時、工業学校の4年生で15歳、前年の夏から勤労動員令で工場で働かされていた。工場に着くと、前夜宿直をしていた班長が「ワシの家の付近はどうだったか」と尋ねるので「班長の家の付近は焼野原でした」と答えた。間もなく班長は休暇を取り、自宅の様子を見に行ってきた。一家族6人、唯



畑、そこは火葬場 死体の山 転げ落ちる 黒こげの死体

火葬場となった場所に近づいた頃、広い道路の左右の溝に、行李、ふとん袋、薄いふとんの包み、俵やかます等が置いてあるのが目に入った。初めのうちは余り気に留めな

一人として姿は無かった」と。翌日、班長の一家6人が床下に掘った防空壕の中で焼死していたことが判った。そして昼食直後、班長は工員と、私、学徒の3名

を連れ、支給されたらしい木棺2個を積んだ大八車と共に、死体収容に向かった。真黒に焼け焦げた死体6個を棺に入れ、指定された臨時の火葬場へと向かったが、途中、路上や路傍で沢山の死者を見た。

「着いたぞ」という声で車を止め、顔を上げた時、左側の畑の向こうに死体の山を見た。そして畑の中一面に死体が沢山置いてあるのが見えた。私達は棺を死体の山のすぐ側に運び、早速火葬することとなった。死体の山は子供以外皆裸体で、幅2メートル、高さ1メートル、長さ20メートル位の長い山脈状に積んであり、時々トラックが入ってきてはその側に停車し、荷台から積んできた死体をその山の上に放っていた。

私達はそのすぐ傍らのかつたが、そのうちの一つから足が出ているのを見て、包みはすべて死体であることを悟った。それからは足下だけ見て車を引いた。

一段低くなった場所で火葬するよう指示され、近くの焼跡に燃料を探しに行き、黒こげの柱や、焼け残った板塀、ごみ箱などを運んで来た。やがて小山のような燃料の上に棺を載せ火を付けた。薄い棺はすぐに燃え上がり、

二度と、福島の子供を繰り返さず、新たな被爆者をつくらないためにも、原発の再稼働阻止とともに、瓦礫受け入れにNO！を発信すること、どうぞ私たちと一緒に声をあげてください。よろしくお願ひします。

（表面からの続き）
どうか被災地に遠慮なく、震災瓦礫の受け入れ反対の声を上げてください。そして、瓦礫の受け入れより、避難者の受け入れに力を貸してください。そして避難するための安全な場所を守ってください。ここ京都市も若狭湾の原発群から60km。もう

中から真黒な死体が二つ三つと転がり落ちてきた。私達はそれを火の中に戻すのに苦労した。2時間位後、火の中から骨を拾い骨壺に入れた。しかし、女性と思われる真黒な塊は何時までくすぶり骨にはならなかった。

加藤裕子

若い母の背で 眠っているように 死んでいる幼子 私は初めて戦争を呪った

はなかつただろう。「どろろ」としてこんな幼い子供が死ななければならぬのだ。私は初めて戦争を呪った。僅かに救われたことは、4人の顔に苦しみの表情が見られなかったことであろうか。66年経た今日でも、この日のことは昨日の日のように憶えている。（松崎貞憲）